

防災連絡会議だより

18号 (令和4年1月12日)

発行 北斗市防災連絡会議

謹賀
新年
2022

今年も元気いっぱい明日ヘトライ！！

年が改まり、決意も新たに活動を始めた方もおられることでしょう。昨年の12月、政府は日本・千島海溝巨大地震が発生した場合の被害想定を公表。初めて示されたのが、冬は厳しい寒さとなる地域で津波から逃れたものの、低体温症で死亡するリスクが高まる「低体温症要対処者」についての想定です。日本海溝モデル、冬の深夜の場合、北海道では約1万9000人、千島海溝モデルでは約1万4700人にも上るとしています。冬季・夜間の訓練も大事なことがわかります。

地域の取り組むべき防災課題については連絡会議としてまとめを行い、事務局とも課題を共有しています。12月の北海道防災総合訓練での新たな課題を含めて、今年は課題解決に向けて着実に踏み出す年でもあると思います。それぞれの町内会に根ざし、連絡会議に結集、さらに人とのつながりを広げ、地域の防災活動を推進していきたいと思います。今年も健康に留意され、無理なさらさないで地域での防災活動を共に前進させましょう。

今年もよろしく願いいたします。★★★

北海道防災総合訓練（厳冬期）に学ぶ 2021年12月18日～19日



この防災訓練には連絡会議の会員14人が参加しています。会員のほとんどが高齢者のため、午後のみに参加に。テントの設営、ハグ、低体温症などの講話、展示の説明会などに参加しました。外部電力を使用し暖かい空気を送っていたこともありましたが、それでも体育館では寒さが身に沁みました。連絡会議から白石勝土さんお一人がテントでの宿泊体験にチャレンジしています。<写真> 体育館の玄関に集合する連絡会議の会員

特集

参加者の声に拾う

<坂井 修>

☆私は、今回の様な防災総合訓練に参加したのは初めてで、大変貴重な体験をさせて頂きました。自衛隊を初め公的機関からも数多く参加され、全道の市町からも参加されておりました。避難所では、自助、共助、公助と言われていますが、それぞれが立場を理解しながら行

政の担当者にはばかりに頼るのではなく、行政の皆さんにも家族があり、人数にも限りがありますので、避難者は、自分の出来る事は積極的に避難所運営に参加（相互扶助）しなければならないことを痛感いたしました。

今回は、歩行困難な方（車椅子を必要とする）を想定する場面は無かった様ですが、もし、災害が発生するとそのような事も必要だと感じました。更には、ペット（犬、猫など）を、飼われている皆さんの避難についても考えなければならない事が多くあるようです。コロナ禍における避難所（厳冬期）の三密対策（暖房と換気・洗面所やトイレ等の共用利用場所での利用方法や距離間）、貴重な水や食事に関する機材の展示についても、今迄の被災地での経験を活かした工夫が随所に渡りなされていて感銘を受けました。

昨今、世界的な異常気象による災害も多く発生しています。国内でも地震や火山噴火や洪水等の想定外の自然災害が発生しております。地域の皆様の中には今迄大きな災害がなかったので大丈夫、この地域はそんな事を心配する必要はないと考えている方が多い様ですが、北斗市の広報を活用し災害に対する市民への普段からの意識付け、理解を得る事も必要と思いました。また、町内会（自治会）単位でも行政の協力により避難訓練を行い肌身で感じ理解する事が必要であると思います。

災害に備えるために、住民それぞれが避難所の確認（場所と移動時間）、心がけ（相互扶助）、盲導犬とペットの犬の違いを理解すること、さらに非常持ち出し袋や家庭での保存食備蓄等、自分の命を守ることを基本に確認・準備しておくことが肝要だと思いました。

<長谷川一夫>

☆避難所での物資は、今までの訓練では見られないものばかりでコンテナトイレ、キッチンバス、PHEV車、自衛隊の特殊車両等を見学、講話により習得したことを今後の防災活動に役立てたいと思います。要望として、避難時でのコロナ対策での手除菌、検温、マスク着用等は徹底されており、良かったのですが、実際の場合、避難者が上履きを持参しないこともあることを想定し、避難所に入る前での靴の洗浄、除菌を行うなど外履きの訓練も必要と思われる。

<石塚正男>

☆避難所では停電を想定した訓練で、自宅の停電は体験していましたが、予想を超えることを感じました。第一に寒さです。防寒対策をして参加しましたが、身体に寒さが伝わり、このまま黙って座っていたならば、低体温となり、これを防ぐには、食べ物では、炭水化物が温かい飲み物より良いことを学びました。

<菱田繁樹>

☆厳冬期における防災訓練は、寒さ対策が第一と机上訓練では理解していましたが、さらに停電と重なった場合は、暗闇のなかでの避難者への口頭、掲示板等の伝達方法についての課題も挙げられていましたが、日頃からの自助、共助が一番大切であり、貴重な体験をさせていただきました。また、改めて停電時におけるトイレ問題の重要性を認識し、今後の訓練等に取り入れていかなければならないと思いました。

＜市川朱美＞

☆多氷点下の中、総合体育館で行われた防災総合訓練。寒さ対策はしていったが、思った以上に寒かった。この寒さの中で災害が発生したらどうなるんだろうかと恐ろしく感じた。そのための訓練であり、命を守ることの大事さが痛感された。防災講話で学ぶことができ、テントの設営などの体験もできた。簡易トイレは初めてのことで、実際にトイレを使用。トイレの中の簡易トイレはせまくて、薄暗くて用を足すのもひと苦労でした。簡単なんだけど、



戸惑った。避難者として19時30分まで参加。夕食のカレーを食べて解散。

後で防災総合訓練のことが新聞、テレビで報道された。災害が本当に発生したら、この寒さでは避難所に来たからといって安心できない。自分の命は自分で守る。訓練に参加でき大変良かった。感染対策もきちんとできていた。

＜写真＞簡易トイレの展示の前で説明を受ける会員

＜川内谷洋子＞

☆多12月18日の総合体育館で開催された北海道防災総合訓練に参加しました。その日は最高気温マイナス4度、最低気温マイナス7度で、この冬一番の寒い日でした。今回は北海道が主催ということで全道からの参加で、遠くは深川の方も参加されていました。私は避難者役として参加しました。集合時間は午後1時からで、全員で30名くらいです。半分は市役所の若い職員でした。正面玄関で一人ずつ検温後、靴を中靴に履き替えて横の格技場に入り、感染予防で一人ずつ離れて座りました。渡された避難者用の用紙に記入しましたが、最初に世帯主名となっていたので私は家族欄に記入しましたが、これでは誰が避難して記入したのかが分からないと思いました。携帯電話の記入欄も必要かと。一番初めに避難者の情報を適切に把握することが大事なことです。さらに、改善したほうが良いと感じました。市職員の避難者役の皆さんは事前にスケジュールや注意事項を周知していたようですが、全体的にスムーズに静かに行動していました。行政としての市の職員の方達が今回の訓練に実際参加して、少しでも流れや体験を積んだことは市民として良い事だったと思います。その後、書き終えた人から屋内での避難者用の宿泊用のテント設営の協力の要請があり、総合体育館の半分のスペースに全部で32基を立てるお手伝いをしました。各企業の展示ブースも見学しました。主に避難者用の簡易トイレや水で発熱する暖房用品が主だったと思います。

次の防災講話が始まる前に、市川さんと二人で女性用トイレに設置された避難時の簡易トイレを使用しましたが、便座は冷たく、使用手順もわかりづらかったと感じました。講話の後、最後のスケジュールの避難所運営演習（Doはぐ）は5名ずつ1グループの9組で行いました。担当者の用意した設問に対してグループ内での話し合いでまとめた意見を発表しました。防災士や保健師さんの防災に関係する方達のグループでしたので、各設問に対する答は同じような適切な答でした。夕食のカレーは野菜も付いて栄養面は考えられていたと思います。

今回の防災訓練は、約7時間の避難者として参加した長い訓練でした。実際に厳冬期に災害が発生したなら避難所に色々な立場の人達が避難して、もっと複雑な状態や状況下になっていくと考えられます。その中で自分と家族をどう守るのか避難者役として今回の災害時に対する自分の行動や状況を事前に考えるきっかけになったと思います。

＜田原勝昭＞

☆ この度の訓練に、「北斗市防災会議」のメンバーとして参加した。

訓練は、12月18日(土)と19日(日)の両日にわたって実施されたが、小生は18日、1日のみ参加させていただいた。この訓練に当たって、9月、開催予定の北斗市において、訓練本番前に訓練参加予定の関係機関職員向け座学研修を実施している。

北海道主催の訓練とはいえ、共催する北斗市を含め、渡島、檜山各自治体職員を巻き込んだことに、北海道(北斗市)の並々ならぬ災害対応に対する真剣さが伺われた。

さて、訓練当日は、前夜からの本格的な寒気と降雪に見舞われ、会場の北斗市総合体育館は、訓練想定 of 停電、断水、当初の無暖房など屋内とはいえ厳しい寒さが予想された。このような中、いわゆる厳冬期の災害発生時に避難するため、多くの住民が駆け付けた際、果たしてスムーズに事が運ぶか懸念がよぎった。一方、この種には混乱が生じるのは常である。訓練会場では、初めに避難所開設や避難者受け入れ、防災講話や展示ブースの見学(講話・説明)、食事(黙食)などを体験した。

2日目は不参加であったが、避難所運営、就寝運営、車中泊講習・演習などに加え、訓練ごとに解説、講話が実施されている。(資料参照)このように大変中身の濃い実地訓練に、参加した関係者は多に参考になったのではないかと。指導運営に当たった関係者に感謝したい。

帰宅後、本訓練を省みた。最初に浮かんだのは、予想される地震(津波)であれ、台風であれ自然災害発生時、自分たちが住んでいる地域で一斉に避難が必要な時に、避難所にいち早く逃げ込むのは住民であり、町内会の役員や自主防災に係わる住民である。そこで問題なのはこのような有事の際、今回を含め防災研修を受けた職員の到着を待って避難所の運営が動き出すのか、はたまた、町会の役員や自主防災関係者、施設の管理人が何の事前ルールも確立していないリーダー不在の中動き出すことに、混乱が予想される。(要感染防止対策等)

今般の防災訓練・研修にこの辺のことを触れて欲しいと思いました。しかし、災害は待つてくれません。何時発生してもいいように周辺町内会は横のつながりを、特に町内会「地区別連絡協議会」ごとに普段からこのことを協議し、コミュニケーションを図って、万全を期すことが大切です。北斗市の防災関係者は、災害時の一早い初動体制の確立は今更論を待ちませんが、今一度町内会の実情把握に努めていただきたいと思います。

訓練参加者の声を紹介しましたが、今後は北海道や北斗市から何らかの訓練を受けての報告がなされると思います。その時には、ご参加いただいて意見交換をしたいと思っています。投稿していただきました皆さん、また、防災訓練にご参加いただいた皆さんに心より感謝申し上げます。また、市の職員の皆さん、事務局の皆さんもお疲れ様でした。(感謝)

学校・地域と連携した防災のすすめ

<防災連絡会議の軌跡>

今年、防災連絡会議として上磯高校、上磯中学校、浜分中学校を訪問しています。上磯高校ではハグ演習のサポート、津波避難ビルの運用についての話し合いを行い、浜分中学校では災害時の避難場所や中学校が実施した防災学習について意見交換を行いました。また、上磯小学校の課外活動にも参加し、4年生と一緒に高規格道路にある避難場所まで歩きました。避難場所のゲートの開錠の仕方を学び、避難場所では防災担当者の注意にメモを取りながら熱心に聞く姿がありました。先生方のご指導の賜物と思います。4年生は避難場所から避難所になっている上磯中学校体育館へ移動し、ここでも防災の学習を行っています。

町内会と一緒に防災訓練を行っている所は、私が知る限りでは、石別、茂辺地地区、それに大野地区だと思えます。子どもたちは学校管理下では、避難訓練を年2回、春と秋に行っていますが、子どもたちは家にいる時の避難訓練の経験がないため、避難場所がわからない子どもたちもいるのです。町内会が主体となって、子どもたちを含めての避難訓練が必要です。学校での防災教育は土曜日のコミュニティスクールなどでも行われるようになっていますが、町内会との関りが、まだ希薄なように思います。

北斗市の防災教育の向上のためには、地域の町内会が主体となり、学校、学校運営協議会と連携することが大事なことと考えます。また、こうした活動を推進するためには、総務課、市民課、教育委員会、社協、防災連絡会議などを含めたボランティア組織と幅広く連携し、推進しやすい環境づくりをする必要があります。町内会の活動の問題や課題については、北斗市町会連合会がまとめた資料にもあるように、町内会への期待は大きいのですが、町内会の現実には厳しい状況にあります。

SDGs（持続可能な開発目標）の理念は改革ではなく、変革なのです。今まさに、大胆な行動提起が求められていると思います。人とのつながりを「創り出す」「広げる」活動をとともに連携して「住みよい北斗市のまちづくり」を行っていきたいと思います。

<上野廣幸>

<資料>

令和3年度 北斗市教育行政執行方針 信頼される学校づくりの推進から一部抜粋

<学校と連携した防災を進めるために>

・・・これからの学校運営については、学校運営協議会によるコミュニティスクールの役割が大きなものとなり、地域、家庭から信頼される学校づくりの推進に努めてまいります。

災害や事故発生時における避難や応急処置については、日頃から学習の中や土曜授業を活用して、防災意識・危機管理意識を高めることが今まで以上に必要になってくると考えており、迅速な情報収集や的確な判断力を養っていかねばなりません。

特に地震災害における津波対応として、避難経路、教職員の役割分担、判断基準等を明確にし、詳細な防災計画の作成をしていかなければならないと考えています。

また、学校が避難場所として活用されることから、避難住民に対して学校が対応できることについての意識の高揚や実際にできることの実践が必要であります。

災害弱者に目を向けた豊橋手話ネットワークの絵カード制作

北海道新聞（2021年12月25日）に愛知県豊橋手話通訳学習者の会が制作した「避難所でのお知らせ絵カード」について紹介されている。



この絵カードは聴覚障がい者と地域住民が一体となって活動できる体制づくりのためのものであり、英語、タガログ語（フィリピン）、ポルトガル語など8か国語で併記され、外国の方にも対応できるようになっている。また、豊橋手話通訳学習者の会や豊橋聴覚障がい者協会など5団体でつくる豊橋ネットワークでは情報交換し、模擬演習を重ねる中で「薬に関する絵カード」制作も行われている。

「みんなで意見を出し合い、良いものができた」とネットワークの代表の方は話している。

この道新の記事を読み、豊橋市の社協を通じて、豊橋手話通訳学習者の会代表の平松靖一郎さんとコンタクトをとり、絵カードなどの資料をメールでいただいている。新年号と一緒に絵カードの資料を会員の皆さんへお届けしたいと思っている。

絵カードについては1500円で購入できますので、年が明けてから購入したいと思っています。「豊橋手話通訳学習者の会」は、昨年、防災功労者内閣総理大臣賞を受賞し、会の活動については内閣官房のホームページの「国土強靱化民間の取組事例」にも掲載されているので、愛知県豊橋手話通訳学習者の会のホームページと合わせて、こちらもご覧いただきたいと思う。

なんでたくさんの方がこの国にはあるのだろう

北の台地は雪に覆われ、風景だけでなく心までもリセットされた気がする。雪が積もった通学路には沢山の子どもの足跡があり、通学路以外の小さな雪山にも子どもたちは足跡を残す。子どもたちは真っ白な雪に何を思うのか聞いてみたい気がする。



日本の伝統色は実に千を超えると言われる。冬の伝統色は何だろうと思い、「日本の伝統色を愉（たの）しむ」（飛鳥新社）を読んでみる。そこには赤、薄紅梅、松葉色、小豆色、雀茶などあり、これらの色は景色や動植物にちなんでいるものが多い。私たちは古（いにしえ）より季節の移ろいを色で表現し、こうした色は日常の生活に彩を添え、生活を豊かなものにしてきた。小豆色は小豆からとられた落ち着いた深い紅赤は神が宿る神聖な色で、幸運を呼び込み、災いを避ける招福パワーを持つ色である。お祝い事があると赤飯を食べるのはその名残。毎年1月11日は「鏡開き」。お供えしたお餅をお汁粉にして「マスクなしの日常が戻ること」を願いながら味わってみたい。

事務局 北斗市総務部総務課交通防災係

電話 73-3111 (内線 212) Fax 73-6970 メール bosai@city.hokuto.hokkaido.jp